

国語 一一一	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (竹取物語)	名前	年	組	番
-----------	------------------------------------	----	---	---	---

竹取物語の冒頭部をすらすら音読できるようにしましょう。

「竹取物語」

いま むかし たけとり おきな (う)もの
 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

のやま たけ と (ず)
 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの
 つか (い) な みやつこ
 ことに使ひけり。名をば、さぬきの造と
 (ん) (い)
 なむいひける。

たけ なか ひか たけ (ん)ひとすじ
 その竹の中に、もと光る竹なむ一筋あ
 よ み つつ
 りける。あやしがりて寄りて見るに、筒の
 なかひか み さんずん
 中光りたり。それを見れば、三寸ばかり
 (しゆう) (い)
 なる人、いとうつくしうてあたり。

取り組んだ日 月 日

国語 一―二	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (平家物語)	名前	年	組	番
-----------	------------------------------------	----	---	---	---

平家物語の冒頭部をすらすら音読できるようにしましょう。

「平家物語」

ぎおんしょうじや かね こえ
祇園精舎の鐘の声、

しよぎようむじよう ひび
諸行無常の響きあり。

しやら そうじゆ はな いろ
娑羅双樹の花の色、

じようしゃひつすい ことわり (わ)
盛者必衰の理をあらはす。

ひと ひさ
おごれる人も久しからず、

はる よ ゆめ
ただ春の夜の夢のごとし。

もの (い) ほろ
たけき者もつひには滅びぬ、

(え) かぜ まえ ちり おな
ひとへに風の前の塵に同じ。

国語 一一三	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (枕草子)	名前	年	組	番
-----------	-----------------------------------	----	---	---	---

枕草子の冒頭部をすらすら音読できるようになりましょう。

「枕草子」春はあけぼの

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

(第一段)

国語 一―四	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (おくの細道)	名前	年	組	番
-----------	-------------------------------------	----	---	---	---

おくの細道の冒頭部をすらすら音読できるようにしましょう。

「おくの細道」

つきひ はくたい かかく
 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟
 うえ しょうがい う うま くち (え) お お むか(う) もの
 の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
 ひびたび たび すみか こじん おお たび し
 日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。
 よ (ず) とし (えん) へんうん かぜ (む) ひようはく
 予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の
 おも(い) かいひん (え) こぞ あきこうしよう はおく
 思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくも
 ふるす (い) とし く はるた かすみ そら しらかわ
 の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河
 せきこ (ん) がみ もの こころ (む) どうそじん
 の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神
 のまねきにあひて、取るもの手につかず。
 やぶ かさ おつ (え) さんり きゆう
 ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸す
 まつしま つき (ず) こころ す かた ひと ゆず
 ゆるより、松島の月まづ 心にかかりて、住める方は人に譲り
 さんぶう べつしよ うつ
 て、杉風が別墅に移るに、
 くさ と す か(む) よ ひな いえ
 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
 おもてはつく いおり はしら
 面八句を庵の柱にかけおく。

国語 一―五	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (万葉・古今・新古今)	名前	年	組	番
-----------	---	----	---	---	---

短歌をすらすら音読できるようになりましょう。

「万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」

万葉集
まんようしゅう

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山
はるす なつきた しろたえ ころもほ あま かぐやま

持統天皇 (巻一・二八)

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ
ひんがし の かぎろい た み (え) み つきかたぶ

柿本人麻呂 (巻一・四八)

古今和歌集
こきんわかしゅう

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香にほひける
ひと こころ し はな むかし か (おじ)

紀貫之 (巻一 春歌上・四二)

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを
おもひ ぬ ひと み し ゆめ し

小野小町 (巻十二 恋歌二・五五二)

新古今和歌集
しんこきんわかしゅう

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ
みち べ しみずなが やなぎ た

西行法師 (巻三 夏歌・二六二)

見わたせば花もみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮
み はな (じ) みぢもなかりけり 浦の 苫屋の 秋の 夕暮

藤原定家 (巻四 秋歌上・三六三)

国語 一一六	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (論語)	名前	年	組	番
-----------	----------------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

論語を音読してみましょう。

1	子曰はく、「 <small>しい</small> <small>(わ)</small> <small>まな</small> <small>とき</small> <small>なら</small> <small>(う)</small> 学びて時にこれを習ふ、また <small>よろこ</small> 説ばしからずや。 <small>ともえんぼう</small> 朋遠方より来たるあり、 <small>たの</small> また楽しからずや。 <small>ひとし</small> 人知らずして慍みず、 <small>くんし</small> また君子ならずや。」と。
2	子曰はく、「 <small>しい</small> <small>(わ)</small> <small>ふる</small> <small>あたた</small> <small>あたら</small> <small>し</small> 故きを温めて新しきを知れ <small>(こ)</small> <small>し</small> ば、もつて師たるべし。」と。
3	子曰はく、「 <small>しい</small> <small>(わ)</small> <small>まな</small> <small>おも</small> <small>(わ)</small> <small>すなわ</small> <small>くら</small> 学びて思はざれば則ち罔し。 <small>おも</small> <small>(い)</small> <small>まな</small> <small>すなわ</small> <small>あやう</small> 思ひて学ばざれば則ち殆し。」と。
4	子曰はく、「 <small>しい</small> <small>(わ)</small> <small>おのれ</small> <small>ほつ</small> 己の欲せざるところは、 <small>ひと</small> <small>ほふ</small> 人に 施すことなかれ。」と。